

「そういえば、あの時も・・・生きたいか	いるみたいだった。	剰な反応を見せた番才らに、不信感を抱いて	を膨らませる。彼にとってのただの質問に過	隣で顔を覆っている雫を見て、雷鼠は軽く頬	知りたかったんだ。そして泣いちゃって。」	のかわからない。だからお姉ちゃんの原因を	って言われると、ぼくは何のために生きてる	し。けど・・・うーん、何のために生きてるの	くも同じかなあ。生きてたいからここにいる	だ、ここには“生きたい人が来る”って。ぼ	「この女将のおばあちゃんが言ってたん	見える。	「ん。」と思考を巡らすその姿は楽しそうにも	雷鼠はあぐらをかき畳に目を落とした。「う	う気持ちになりますか？」	「そうです。同じ質問をされて、君はどうい	「ぼくが？」						不思議な反応
---------------------	-----------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-----------------------	----------------------	----------------------	--------------------	------	-----------------------	----------------------	--------------	----------------------	--------	--	--	--	--	--	--------

ま	代	ま		返	話	「	「	じ	「	思	盾	「	「	る	わ	「	び	避	ら
し	償	し	「	球	が	で	そ	ゃ	そ	い	を	ど	矛	こ	り	け	上	雷	だ
た	と	た	わ	の	で	し	う	な	う	ま	、	ん	盾	と	は	れ	が	針	と
が	し	。	た	球	き	よ	で	い	そ	す	、	ん	も	矛	矛	ど	つ	の	言
、	て	眠	し	威	て	！	す	が	う	ね	、	・	貫	と	盾	今	た	横	っ
こ	痛	る	は	が	い	」	ね	あ	で	。	ど	く	、	ど	も	で	に	、	て
う	み	前	今	投	る		。	り		そ	っ	ど	ど	ん	も	今	立	、	い
し	と	と	日	げ	の		そ	ま		の	ち	ん	ん	な	も	も	、	い	ま
て	恐	何	運	る	が		の	し		余	も	な	矛	矛	も	そ	、	ま	し
君	怖	一	良	度	程		程	た		楽	買	も	も	も	れ	聞	、	し	た
と	を	つ	く	に	し		し	か		い	っ	通	通	も	いた	時	、	た	ね
の	記	変	目	強	い		か	、		の	ち	さ	さ	も	の	の	一	。	」
約	憶	わ	覚	く	か		、	会		話	え	な	い	か	感	瞬	瞬		
束	に	ら	め	な	か		会	話		の	付	い	い	か	想	だ	け		
を	植	い	る	っ	、		話	の		の	け	い	い	い	は	浮	か		
果	え	や	こ	て	で						ら	い	い	い	変				
た	付	、	と	き	き						れ	い	い	い					
せ	け		が	い	い						い	い	い	い					
て	ら		で	い	い						い	い	い	い					
い	れ		き	い	い						い	い	い	い					

「ありますせん。」  
 「いいから。ある？」  
 「なぜそんなことを聞くんですか？」  
 それに自信が持てなかった。  
 いる解答に間違いはないはずなのに、なぜか  
 険しい表情を雷鼠に向けた。今頭に浮かんで  
 唐突な質問とその内容に、番才は眉根を寄せ  
 「番才さんはさ！死んだことある？」  
 先ほどと同じトーンで考え始めた。  
 て寄越した問いを意に介さず、「うーん」と  
 雷鼠は番才があえて対等な立ち位置から投げ  
 してるんだい？」  
 わたしも君にしよう。君は何でそんなことを  
 に君がした興味本位からくる無慈悲な質問を  
 しているようにわたしには見える。雨ノさん  
 もしくはそれと同等の痛みを自ら受けようと  
 生きたいと望みながら君は死ぬかもしれない  
 「だけど、それは君も同じじゃないのかい？  
 「うん。ぼく嬉しいよ！」  
 ます。」

な	浮遊感を確かに身体が覚えている。凄まじ	ジエットコースターが急降下した時のよう	止まった。	番才は突如として現れた見慣れぬ記憶に立ち	(ん?)	る。そして浮遊感と開放感。	できるほど痛みは強烈に脳裏に食い込んでい	ほんの数秒の出来事だったが順を追って説明	出し、衣服ごと二人の人間を炭化させていく	た。水分が蒸発して肩や顔の穴から煙が噴き	突き破るように熱が肌を黒く染め上げていつ	まず身体の内側から焦げ始めそれから皮膚を	熱のような意地の悪い熱さが全身に広がり、	となつてしまい呼吸ができなくなつた。摩擦	焼き切り、溶けた気道の内壁同士が一つの塊	首の後ろから伝わった電流は即座に喉仏を	記憶にこびりついた鮮明な痛みが蘇つてきた	じたの？」	に打たれた時どうだった？番才さんは何を感じ	「そっか・・・ぼくもないんだ。でもさ、雷
---	---------------------	---------------------	-------	----------------------	------	---------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	----------------------	-------	-----------------------	----------------------

い痛みを忘れるほどのその感覚は、日常生活  
 では到底経験できるはずもないほどの不思議  
 な高揚感だった。筋肉まで焼けてしまった脚  
 が体重を支えきれなくなり、屋根瓦を転がっ  
 て女将のいた大地に落ちていった時、絶命し  
 かけていた中で最後に考えていたことは、今  
 でも信じられないほどあっけらかんとした内  
 容だった。

（よかった。これで終われる。）

何かにぶつかった衝撃と共に意識は途切れた

「番才さん！」

雷鼠の呼びかけで意識は現実に戻った。

「ねえ、聞いている？ どうだったの？」

「え？・・・ああ。そうですね。不思議、い  
 や、というか奇妙な感覚でしたね。今は確実  
 に生きていますと断言できますが、もしかした  
 らあの時わたしは一度死んだのかもしれない  
 「生きてるってことをもつと実感できてるっ  
 てこと？」

「そうとも言えます。二度目と言うか、振り

出しに戻れたと言うか・・・」  
「そうなんだ・・・あのね番才さん、それは  
ぼくも一緒なんだ。」  
少年は足を体に引き寄せ抱え込んだ。  
「・・・もしかして君は！？そのために？  
話の中に置かれた見えない何かが目の前に現  
れ、番才はその考えと雷鼠とを交互に見なが  
ら球を投げた。  
「ぼくは、生きてるよね？」  
「そうかい。だからあんなことを。」  
「ええ。雷鼠君は恐らく死に対する恐怖心が  
人よりも少ないか、もしくははないんだと思  
います。実際にそういった方の症例はありま  
す。同じように苦しんでいる方はいます。依  
存症と同じように、あるものに執着して人が  
変わったように見えたこともこれで納得でき  
ます。動機は違ったとしても、心理的な情動  
によつてそうなっているのも間違いありませ  
ん。」

「	自	傷	行	為	は	発	作	的	に	起	こ	る	も	の	な	ん	だ	ら	う
に	。																		
れ	ば	な	ら	な	い	事	情	を	背	負	っ	て	い	る	な	ん	て	本	当
見	え	な	い	で	す	ね	。	と	て	も	こ	の	宿	に	宿	泊	し	な	け
「	こ	う	し	て	見	て	い	る	と	、	た	だ	の	少	年	に	し	か	
才	は	複	雑	な	表	情	で	そ	の	様	子	を	眺	め	て	い	た	。	
い	る	。	横	で	同	じ	よ	う	に	お	茶	を	飲	み	な	が	ら	、	番
し	い	よ	女	将	さん	」	と	終	始	に	こ	や	か	に	過	ご	し	て	
音	を	立	て	な	が	ら	器	を	傾	け	「	こ	の	お	茶	凄	く	美	味
「	う	ん	！	で	も	死	ん	じ	ゃ	う	の	は	嫌	だ	も	ん	」		
じ	る	ん	だ	ら	う	？	「												
は	大	変	な	こ	と	だ	よ	。	恐	怖	は	な	く	て	も	痛	み	は	感
を	確	認	す	る	た	め	に	自	分	を	傷	つ	け	に	や	な	ら	ん	の
	「	普	通	に	し	て	れ	ば	生	き	て	い	け	る	も	の	を	、	生
つ	た	。																	
が	ら	、	雷	鼠	は	無	邪	気	そ	う	に	笑	い	な	が	ら	そ	う	言
二	杯	目	の	お	茶	の	入	っ	た	湯	呑	み	を	両	手	で	包	み	な
「	そ	う	か	な	？	ぼ	く	っ	て	そ	ん	な	に	大	変	な	の	？	「
が	、	若	い	の	に	ね	え	。	大	変	だ	ね	え	雷	鼠	」			
「	生	ま	れ	つ	き	か	、	後	天	的	な	も	の	か	は	わ	か	ら	ん

「	す	い	ま	せ	ん	。	わ	た	し	一	人	で	は	余	計	に	傷	つ	け
見	て	、	女	将	が	や	れ	や	れ	と	音	に	し	て	い	る	。		
番	才	の	横	で	カ	ウ	ン	タ	ー	に	突	っ	伏	し	て	い	る	雫	を
	「	そ	れ	と	。	こ	の	子	も	重	症	だ	ね	」					
重	く	番	才	に	の	し	か	か	っ	た	。								
よ	う	と	す	る	こ	と	が	正	し	い	の	か	”	と	い	う	問	い	が
“	生	き	る	た	め	に	自	身	を	傷	つ	け	る	こ	と	を	、	止	め
「	・	・	・	そ	う	で	す	よ	ね	」									
て	」																		
力	に	変	え	ら	れ	る	種	族	だ	。	色	々	あ	っ	た	ん	だ	ら	う
は	免	疫	が	な	い	の	と	訓	練	不	足	。	本	来	な	ら	そ	れ	を
い	な	い	だ	ら	う	け	ど	、	雷	に	打	た	れ	て	傷	を	負	う	の
く	の	は	変	わ	ら	な	い	。	年	齢	と	い	う	概	念	は	持	っ	て
力	も	ね	。	け	ど	、	そ	れ	も	徐	々	に	強	く	成	長	し	て	い
達	と	は	違	っ	て	丈	夫	な	は	ず	だ	よ	。	そ	れ	こ	そ	回	復
「	さ	あ	、	ど	う	だ	ら	う	ね	。	身	体	の	作	り	は	あ	ん	た
「	こ	こ	に	来	る	前	も	そ	う	だ	っ	た	の	で	し	よ	う	か	」
の	桁	が	違	う	か	ら	な	の	か	も	し	れ	な	い	が	ね	」		
の	が	そ	の	証	拠	だ	ら	う	て	。	ま	あ	そ	れ	で	も	、	自	傷
ね	。	お	湯	を	ち	ゃ	ん	と	冷	ま	し	て	か	ら	飲	ん	で	い	る



も	側	表	に	将	「	「	や	「	持	「	し	と	と	を	連	立	て	「	て
な	に	情	細	に	は	お	な	ひ	ち	あ	た	一	も	覚	れ	ち	来	い	し
い	人	を	く	心	い	ば	さ	つ	が	あ	こ	人	で	え	て	上	来	や	ま
が	が	想	、	の	は	あ	そ	ひ	楽	ち	と	に	き	て	が	る	は	構	い
、	い	像	流	中	い	ち	う	っ	に	ゃ	だ	し	た	し	雷	こ	思	わ	い
そ	る	し	水	で	い	ゃ	だ	っ	な	ん	よ	っ	た	か	鼠	も	わ	な	い
れ	。	た	の	礼	い	ん	だ	っ	か	お	。	。	。	と	が	ま	な	い	よ
の	比	。	よ	を	い	か	よ	。	思	か	。	。	。	と	い	ま	な	。	。
苦	べ		う	言	い	わ	。	。	い	。				は	。	。	。	。	。
し	る		に	い	、	り			ま					は					
み	こ		流	、	番	！			し					は					
を	と		れ	才	は	。			て					。					
背	な		る	は	雫	の			。					。					
負	ど		髪	雫	の	糸								。					
い	で		の	の	の	の								。					
そ	き		毛	よ	よ	よ								。					
れ	る		で	う	う	う								。					
と	は		隠	う	う	う								。					
	ず		れ	。										。					
			た											。					

てしまいいそうぞ。」

「いや構わないよ。ただ、こんなに早く連れ

て来るとは思わなかったけどね。」

立ち上がることもままならない雫を部屋から

連れて来てしまったことには、番才は罪悪感

を覚えていた。しかし、あのまま寄り添うこ

ともできたが雷鼠がいる。雷鼠と部屋を出る

と一人にしてしまう状況で、苦肉の策で実行

したことだった。

「あのお茶を飲んでもらえれば、少しは気

持ちが楽になるかと思ひまして。」

「ひっひっひっ。とても飲めるような心境じ

やなさそうだよ。」

「おばあちゃんおかわり！」

「はいはい。」と雷鼠の方へと意識を向けた女

将に心の中で礼を言い、番才は雫の糸のよう

に細く、流水のように流れる髪の毛で隠れた

表情を想像した。

側に人がいる。比べることなどできるはず

もないが、それぞれの苦しみを背負いそれと

戦っている人が。一時かもしれないし、一瞬  
かもしれない。それでもこうして笑顔と笑い  
声が聞こえる場所に参加できている自分を、  
褒めてあげて欲しいと思った。彼女も今笑っ  
ていて欲しいと願った。

〜続く〜